慶 應 義 塾

ISSN 1349-6468

福澤研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第37号　2022年10月31日 発行

目　次

＊Albert Craig: In Memoriam（Kate Wildman Nakai）… 2
＊アルバート・クレイグ先生を偲んで
（ケイト・ワイルドマン・ナカイ、邦訳 田中アユ子）… 3
＊福沢研究の「新しさ」―クレイグ教授の着眼点
（梅津順一）…… 4
＊ご自宅での思い出（小川原正道）…… 4
＊アルバート・クレイグ先生の思い出（松田宏一郎）… 5
＊アルバート・クレイグ追悼録…… 5・6
＊梨花史学研究所との協定に基づく事業　短期研修
と韓日歴史をめぐるワークショップ第6回…… 7・8
＊2022年度未来先導基金プログラム　福沢諭吉と
「人間交際」を深めるワークショップ …… 8・9
＊2022年度アーカイブズ講座 ……10
＊主な動き……10
＊新収資料紹介……11
＊センター諸記録（2022年4月～2022年9月）……12

アルバート・クレイグ先生といえば、温和な笑顔と機知にとんだ会話を思い出す。初めて先生を福沢研究センターの訪問教授としてお迎えしたのは、1996年2月から3月にかけてであった。その後4月から、長きにわたり客員所員を務めていただいた。2007年には弊センター主催のシンポジウム「海をわたる『福翁自伝』―翻訳から考える福沢諭吉」でパネリストをお願いし、「『福翁自伝』：欧米人の観点」の報告をされた。2013年の4月5月に再度訪問教授としてご滞在の際には、5月24日に三田演説館で“The National Assembly in Fukuzawa's Later Thought.”（後期福沢思想における国会論）のご講演をしていただいた。

福沢に関する主な著作は、1985年1月10日の福沢諭吉生誕百五十年記念式典でのご講演録「福沢諭吉の歴史意識と文明開化」（福沢記念選書）の他、2009年に慶應義塾大学出版会から『文明と啓蒙：初期福沢諭吉の思想』を上梓、2019年には弊センターも協力し Bloomsbury Academic（英国）より *Selected Essays by Fukuzawa Yukichi On Government* を出版されている。

本号ではクレイグ先生を偲び、知己の先生方にご寄稿いただくと共に、アンドリュー・ゴードン ハーバード大学教授のご協力で、The Harvard Gazette から追悼記事を邦訳し掲載した。私の訳ではクレイグ先生も心もとなかったと思うが、燿子・クレイグさんとポール・クレイグさんが確認をしてくださった。ここに深く感謝の意を申し上げたい。

先生に今すぐお会いすることは叶わなくなってしまったが、たくさんのお土産話を届けられるよう、微力ながら弊センターの成果を積み上げていきたいと思う。

（西沢直子）

Albert Craig: In Memoriam

Kate Wildman Nakai, Professor Emerita, Sophia University

My memories of Albert Craig go back to the fall of 1964 when I started graduate studies at Harvard University and he became one of my advisors. As a mentor he offered steadfast guidance and support throughout my time at Harvard and long thereafter. Among other things, it was owing to him that I became acquainted with Arai Hakuseki, an encounter that had a far-reaching impact on my life. My study of Japan up to that point had centered on language and literature, and my knowledge of Japanese history was rudimentary at best. Al (as I much later came to know him) suggested that I take Hakuseki's *Kishinron* as the topic for a seminar paper. I went on to focus on Hakuseki for my PhD dissertation, an experience that introduced me to many of the issues in Japanese history that have held my interest since.

Al later once mentioned that after moving to Harvard at a still early stage in his career he worked on developing a list of topics suitable for graduate students wanting to do research in Japanese history. The 1960s was a time when the number of such students was expanding rapidly, and I doubt that few were much better prepared than I was to identify an appropriate topic solely on their own. Many of the numerous students Al advised both at my time and over the following decades must be indebted to him for a suggestion that started them on their way or helped them to see an inchoate topic to a fruitful conclusion.

Al's suggestion of *Kishinron* to me presumably resulted from this wide-ranging project to identify topics for students to explore. As such it is emblematic of the seriousness and deep sense of responsibility that he brought to the task of mentoring. I imagine, though, that other factors also drew him to Hakuseki and *Kishinron*. Most likely he recognized in this topic one of the questions that would underlie his long engagement with Fukuzawa Yukichi, an engagement that was beginning at just about this time: What was the mental universe that shaped the outlook of Tokugawa thinkers and how did it connect with that of their Meiji successors?

For his own dissertation (published in 1961), Al focused on the factors that accounted for Chōshū's playing a leading role in the Meiji Restoration and what these said about the character and social foundations of political developments in mid-nineteenth-century Japan. The analysis reflected his reservations regarding class conflict as a driving force behind the Restoration. It also showed his attunement to incremental shifts in attitudes and ideas that result eventually in a change in their orientation. Exploration of that phenomenon was a persistent theme of his subsequent research.

Al seems initially to have envisioned a multipronged investigation of this theme. A first prong focused on the development of scientific thought within the Tokugawa Confucian intellectual framework and how that carried over into Meiji. He evidently planned to expand that project beyond an article published in 1965, but meanwhile he turned to the second prong—Fukuzawa—and Fukuzawa would continue to hold his attention for the rest of his life.

The basic contours of Al's interest in Fukuzawa were set out already in his 1968 article "Fukuzawa Yukichi: The Philosophical Foundations of Meiji Nationalism." A masterful survey of the evolution in Fukuzawa's world view from the *bakumatsu* period to his last years, "Philosophical Foundations" has stood the test of time. When, forty years later, Columbia University Press published a new edition of the English translation of Fukuzawa's autobiography, it included "Philosophical Foundations" as an interpretive guide. In his last works, including a collaborative project with his wife, Teruko, to translate into English a range of Fukuzawa's writings on government, Al revisited and reflected further on many of the essays by Fukuzawa that he had first explored in "Philosophical Foundations." The overlap attests to the continuity in his perspective on Fukuzawa, but it also shows, I think, a subtle but not insignificant shift.

2013年5月24日
慶應義塾大学三田キャンパスにて

"Philosophical Foundations" presents Fukuzawa largely as an adapter of Western ideas to Japanese circumstances. Al's subsequent close investigation of the English-language sources from which Fukuzawa drew—some long forgotten today—alerted him to another dimension of Fukuzawa's enterprise. He came to see Fukuzawa as not just a thinker who accurately understood new and different Western ideas and terms and made them accessible to his Japanese readership. Fukuzawa also, Al pointed out, brought into play implications of those ideas that had not necessarily been apparent to their originators.

Al found in Fukuzawa a guide and interlocutor in his own ongoing exploration of Western intellectual traditions and Japanese history. Fukuzawa is equally fortunate to have had Albert Craig as his foremost interpreter to the English-speaking world.

アルバート・クレイグ先生を偲んで

上智大学名誉教授　ケイト・ワイルドマン・ナカイ
邦訳　田　中　アユ子

私のクレイグ先生との思い出は、1964年秋にハーバード大学の大学院生になった際、先生がアドバイザーの一人となったことに遡る。大学院で学んでいる間、先生は指導教員として常に適切な助言を与え、支えてくださる方だった。それは卒業後もずっと変わることがなかった。新井白石との出会いは私の人生に大きな影響をおよぼしたが、これも先生を通じてのものだった。それまで私の日本についての勉強は言語と日本文学を中心としたもので、日本史の知識は乏しかった。ところがある時、先生から授業でのレポート課題として、新井白石の『鬼神論』を扱ってみてはどうかと提案されたのである。それがきっかけで、私は博士論文で白石に取り組むことになった。この研究を通じて日本史をめぐる様々なテーマと出会うこととなり、そうしたテーマへの関心がその後の私の研究生活を導くものとなったのだ。

先生は若手の研究者としてハーバード大学に着任した際、日本史を研究したい大学院生向けの研究テーマのリスト作成に取り組んだと伺ったことがある。60年代には日本史研究を志す学生の数が急激に増えていたが、一人で適切なテーマを見つけられるほどに十分な知識を備え、準備が整っていた学生は私を含めほとんどいなかった。私が大学院生だった頃、またその後の何十年間に先生は多くの学生を指導したが、研究を始める手掛かりをいただいたり、まだ明確に捉えかねていたテーマを形あるものにしていく上で有意義な助言をいただいたことに皆感謝しているだろう。

『鬼神論』を扱うという助言は、大学院生向けに考えた様々な研究テーマから出てきたものではないだろうか。この助言にも先生が学生指導に真剣に取り組み、責任感をもって臨んでいたことがよく表れている。しかし、先生が新井白石や『鬼神論』に関心をもったことには別の理由もあったのではないか。おそらくはこのテーマのなかに、長年取り組んだ福沢諭吉研究（私に『鬼神論』を提案したのは、この研究に着手して間もない頃だった）の根底をなす問題の一つが含まれていると考えたのだろう。それは、徳川時代の思想家の思考の枠組みを規定した精神的世界はどのようなものであったのか、そうした精神的世界は明治時代の思想家の思考枠組みとどのようにつながっているのかという問題である。

先生は博士論文（1961年出版）のなかで、明治維新においてなぜ長州藩が指導的役割をはたしたのかを説明する要因に着目し、そこから得られた知見をもとに19世紀半ばの日本政治史の展開に見られる特徴や、その社会的基盤についても分析した。そのなかでは、階級闘争が明治維新を推し進めた原動力だとする見解への疑念が述べられる一方で、人々の態度や思考における小さな変化が積み重なり、やがては基本的な転換につながっていったという見方に同調する姿勢が示されていた。こうした見方を実証していくことは先生の後年の研究に一貫するテーマの一つとなった。

当初は、このテーマを様々な方向から多角的に研究していこうと計画していたようだ。研究の一つ目の方向性は、徳川時代の儒教思想の枠組みのなかで科学的思考がどのように展開し、明治時代にどう受け継がれたかを解明しようとするものだった。65年に発表した論文以外にも、この研究をさらに膨らませていくつもりだったようだが、先生は研究のもう一つの方向性にも注力するようになった。それが福沢諭吉研究であるが、福沢は生涯先生の関心を捉えて離さなかった。

福沢に対する先生の関心の基本的ありようは、68年に発表した論文 “Fukuzawa Yukichi: The Philosophical Foundations of Meiji Nationalism”（福沢諭吉―明治国家形成の思想的基盤）のなかにすでに表れている。幕末から晩年までの福沢の世界観の展開を辿ったこの論文は優れた研究であり、長年にわたり高く評価されてきた。そのことは論文が発表されてから四十年後、コロンビア大学出版が『福翁自伝』の英訳の新版を出した際に、この論文が福沢理解の手引きとして収録されたことにも表れている。先生は晩年の仕事（福沢の政治論をまとめて燿子夫人と共同で英訳したものを含む）において、『思想的基盤』のなかで初めて考察した福沢の種々の論考を見直し、省察を深めていった。こうした省察には従来と同じ見解が示されている部分もあり、それは先生の福沢観が終始一貫したものであったことを示しているが、一方ではかすかだが重要な変化も見受けられる。

『思想的基盤』では、福沢は西洋思想を日本の状況に合わせて解釈・適用した人物として描かれていた。しかし後年になって福沢が引用し、参考とした英語文献（今では忘れられて久しいものもある）を丹念に調べることで、先生は福沢の異なる側面に気づいたようだ。先生は、福沢は日本になかった新しい西洋の思想や用語を正確に理解し、日本の読者に分かりやすく紹介しただけでなく、むしろそうした思想や用語から、それを生み出した西洋人さえも必ずしも気づいていなかったような含意を引き出し、明らかにした思想家なのだと評している。

先生は西洋の知的伝統と日本の出会いを探求し続ける旅のなかで、福沢を先達、また良き話し相手と考えていた。しかし福沢にとっても、英語圏にその思想や生涯を伝える第一人者としてクレイグ先生を得たことは幸いだったのではないだろうか。

福沢研究の「新しさ」―クレイグ教授の着眼点

青山学院大学名誉教授　梅　津　順　一

『文明と啓蒙』共訳者の一人として、最初に気付いたことは、クレイグ教授が自己の研究の「新しさ」を、「福沢を日本の思想家であるとともに、西洋の思想家として積極的に評価すること」と記していることであった。福沢が西洋の思想を理解し、日本の進路を示唆した啓蒙思想家であることは、誰もが異論がない。クレイグ教授は、その福沢の知的活動が、スコットランド啓蒙を日本の現実と格闘させ、その可能性を新しく切り拓いたことから、西洋の思想家だというのである。

興味深いことに、クレイグ教授はエジプトの啓蒙思想家タフターウィーと比較している。タフターウィーは、福沢と同じく、ギゾーなどの著作で文明史論を学んだが、エジプトを欧米と同じ文明段階に位置づけ、理論と現実を妥協させ、文明論を発展させることが出来なかった。福沢は日本文明の過去と現在を批判的に捉えただけでなく、西洋社会の現実をも批判的に視野に置くことができた。

では、日本の思想家にして西洋の思想家、福沢諭吉誕生の秘密はどこに求められるのか。クレイグ教授が丹念に掘り起こした福沢の学習方法は、一つの回答になる。福沢が英学を始めたのが1858年、『学問のすゝめ』初編によって、独立した思想家として発言し始めるのが1872年。その間14年は福沢の学習期間であった。とくに福沢は教科書を丹念に読み、アメリカの高校地理の教科書から始め、スコットランドで刊行された社会人用の教科書、バートンの『政治経済学』、『童蒙教え草』を翻訳し、さらにアメリカの標準的大学教科書、ウェーランドの経済学、道徳学に学んだ。

『文明論之概略』で取り組まれたギゾーとバックルの大著は、当代一流の歴史書、文明論であったが、福沢は高校の教科書の読解、翻訳から始めて、一歩一歩前進し、最高水準に到達した。しかも、福沢は教科書の記述を、無批判に受け入れたのではなく、自己の経験と引き比べ、西洋と日本を比較し、文明論の確かさを求めていった。今日の学校現場では、批判的思考や対話的学習の重要性が指摘されているが、福沢はそれを独力で実践したのである。

ともすれば、我々は、福沢とは違って、海外の最新理論に惹かれるとき、その理論の成立史は問わずに、それで自国の現実を裁断する傾向がある。クレイグ教授が示唆した福沢諭吉の「新しさ」は、今日のグローバルな世界にふさわしい着眼点といえよう。

ご自宅での思い出

慶應義塾大学法学部教授　小川原　正　道

アルバート・M・クレイグ先生にはじめてお目にかかったのは、2005年のことである。当時、イリノイ大学に留学中だった20代の私は、資料調査のため、ハーバード大学を訪れた。クレイグ先生にメールを差し上げたところ、ハーバードのファカルティクラブで快く歓待していただき、日本研究に取り組んでこられた経緯や、日本での思い出などを話され、慶應義塾出身で福沢研究を専門にしている人は意外に少ないので、頑張って欲しいと激励された。ご著作でしか知ることのできなかった碩学に直接接し、大いに励まされたことを記憶している。

2013年から翌年にかけては、ハーバード大学ライシャワー日本研究所に客員研究員として滞在した。当時、燿子夫人が福沢の政治関係著作の英訳に取り組んでおられ、ご自宅にお招きいただいて、三人で談論を交わした。特に、『分権論』の英訳にあたって、お二人から多くのご質問を頂戴し、可能な範囲でお答えしたが、福沢の意図を正確に読み取ろうとする学究としての真摯な姿勢に、頭が下がる思いだった。

クレイグ先生のご著書のなかでも、*Civilization and Enlightenment: the Early Thought of Fukuzawa Yukichi*（邦訳は『文明と啓蒙―初期福沢諭吉の思想』）には、特に多くを教えられた。私のもとで学んだ姜兌玧君が、福沢の初期思想の研究に取り組んでおり、サミュエル・A・ミッチェルの地理書の貴重な版を、お借りしたこともある。姜君はそれらをもとに博士論文を執筆し、学位を取得した。この博論を本にしたものを携え、御礼を申し上げようと考えていたが、その機会が失われてしまった。

『分権論』の英訳は、ご夫妻の編・訳として2019年に刊行された、*Selected Essays by Fukuzawa Yukichi : On Government* に収録されている。『分権論』から『国会の前途』まで、福沢の政治思想を考える上で重要な著作をはじめて英訳されたことは、福沢研究にとって大きな貢献だが、これが先生の最後の著書となってしまった。

英語圏で、クレイグ先生に匹敵する福沢研究者がいるかと問われれば、即答することは難しい。今後、先生の遺された業績に学んだ後進の研究者のなかから、優れた後継者が現れてくることを、願ってやまない。

心より、先生のご冥福をお祈りする次第である。

アルバート・クレイグ先生の思い出

立教大学教授　松　田　宏一郎

アルバート・クレイグ先生が昨年12月に亡くなられた知らせは、少し後になって慶應義塾福沢研究センターからうかがった。このたび『通信』に追悼記事を執筆する機会をいただき大変光栄に思う。今更ではあるがご冥福をお祈りしたい。

筆者はクレイグ先生の *Chōshū in the Meiji Restoration*（1961）を大学院生の時に読み、歴史学と政治学を架橋した手腕にとても惹かれた。同書は、徳川後期の長州藩と徳川体制の政治構造から丁寧に説き起こして、国民国家統一に長州藩がいかなる役割を果たしたのか明晰に分析したものとして、現在でも評価が高い。また、福沢諭吉の『西洋事情』に記された「シンモン・ベリヘンテ」とは誰か、あるいは執筆者名が明記されていなかったチェンバーズ社『経済学』を書いたのは誰か、西洋の地理学書の福沢の読解の特徴など、地道で丁寧な調査から組み上げられていった福沢諭吉の文明観についての近年のご研究は、その謎解きの過程そのものがなにより面白く、楽しんで拝読した。さらに、ご著書としてまとめられた *Civilization and Enlightenment: The Early Thought of Fukuzawa Yukichi*（2009. 邦訳は 足立康、梅津順一訳『文明と啓蒙―初期福沢諭吉の思想』2009年）については、拙評を *Monumenta Nipponica* および *The Japan Times* に掲載する機会があった。

とはいえ、直接お目にかかることができたのは比較的最近である。2013年4月から5月に慶應義塾を訪問していらしたクレイグ先生と奥様の燿子先生を囲んでの歓談の場や、クレイグ先生の講演会、またその頃燿子先生が進めていらした福沢の明治10年代から20年代初期の中小篇を英訳する計画に関連して、僭越ながら研究者としての立場から質問やコメントを差し上げる機会があった。その時のクレイグ先生の真摯で、時に納得するまで深く考えていらっしゃるご様子などは、すでに『福沢研究センター通信』第19号（2013年12月）の拙稿に記したとおりである。

その後、福沢論を含む拙著や関連論文をお贈りした際のやりとりなど、メールでの意見交換があったが、またどこかでお会いしましょうという約束は結局果たせなかった。燿子先生が翻訳され、クレイグ先生が序文を書かれた、Teruko Craig, *Selected Essays by Fukuzawa Yukichi: On Government* (Bloomsbury Academic, 2019) が出版となり、そこに収録された『国会の前途』での、福沢における徳川体制評価の変化についての注には拙論も紹介され、私の意見が少しは役立ったかもしれないと、大変光栄に思った。

クレイグ先生の1960年代の福沢研究では、「福沢諭吉―明治ナショナリズムの哲学的基礎」（1968年）に表れるように、西洋の国民国家形成思想を受容し、近代化とナショナリズムを結合させた思想家という捉え方であったように思われるが、近年のものでは、日本の歴史的位相に対しても、西洋の進歩史観に対しても、福沢には批判的な眼と自己の立ち位置の危うさへの自覚があること、また時には読者を誘導する仕掛けも厭わないしたたかな発言者でもあるという、より陰影のある立体的な福沢像をクレイグ先生は抱いていたのではないかと感じる。

福沢の『尊王論』や『帝室論』に、政治状況への対応だけでなく、社会科学的知識の深化があるというご意見をお目にかかった際にうかがったが、私もかねてからそう考えていたので大変納得した。他にも、徳川政治体制の姿や日本における儒教の思想史的な性格付けが、1960年代と現在では全く変わってきているが、そういった研究動向の変化についても目配りされていると、直接お会いしたときの会話の中で感じた。新しい研究動向や学問的批判に常に謙虚に接する態度をお持ちだったと思う。

今となっては、もっと早い時期にお目にかかり、もっといろいろな場面で議論をしてみたかった。あまり歴史学の方法論的な議論を好まれてはいなかったと思うが、時々の風潮に足をとられることなく明治日本研究を続けられてきたクレイグ先生が、たとえば若い学生・研究者とどのように接していたのか、その現場を見てみたかった。しかし、そういった直接の交流があった方々は、いろいろな場でその思い出を記されていることだろう。2010年代になってから幸運にも少しだけ交流の機会をいただいた筆者としては、あらためてそのご著作を読み直しながら、クレイグ先生の柔らかな口調と穏やかな笑顔を思い浮かべ、学問への真摯な態度に少しでも近づきたいと願うだけである。

アルバート・クレイグ追悼録

https://news.harvard.edu/gazette/story/2022/05/albert-morton-craig-93/

アルバート・クレイグは、アダ・クレンデニン・クレイグとアルバー・モートン・クレイグのもと、1927年12月9日にシカゴで生まれた。10歳のとき父を心臓発作で失い、家計は苦しかったが、彼は水泳によって奨学金を得、ノースウェスタン大学に進学した。

1946年に徴兵され、京都に配属された。彼は寺院を

訪ね、柔道を学ぶ時間を得て、そして1953年に結婚することになる烏賀陽燿子と出会った。母国に戻り、1949年にノースウェスタン大学の哲学科を卒業した。

最初のフルブライトの特別奨学金を得て、ストラスブールグ大学で1年間経済史を学び、1951年から1953年まで京都大学で日本語と日本史を学んだ。その間に柔道では黒帯4段になった。その後ハーバードで日本史の博士号に取り組み、1959年に取得した。彼はすぐに歴史学部の准教授の地位を得て、1999年に退職するまでハーバードで教えた。

クレイグの博士論文「明治維新における長州」は先駆的な研究となった。彼の業績は、長州藩や他藩の武士による徳川幕藩体制の崩壊と日本の近代化革命の推進過程に関する、歴史的理解の枠組みを変えた。当時マルクス主義に基づく研究で固められていた日本の解釈に対し、クレイグは下級武士と商人との階層を超えた連携に変化への要因を見出した。クレイグは、この時代に重大な変化を引き起こした原動力として、伝統的な武士たちの価値観に強く結び付いている proto-nationalism（初期愛国心）を想定した。彼は大きな疑問に向かって丁寧に議論することを楽しんだ。『明治維新における長州』のあとがきで、彼は次のように書いている。「私はいつも、他の多くの学者への同意よりも、遠山茂樹教授に対する反論から多くのことを学んでいる。」

その後10年以上、クレイグは19世紀後半の日本の近代化における最も重要な知識人、福沢諭吉の著作に深く取り組んだ。とてつもなく大変な調査を経て―デジタルリサーチの時代になった今ならずっと容易であろうが―彼は福沢が西洋に対する知識を少なからず初等教育の生徒のための一般的な英語のリーダー（reader）から得たことを見いだした。クレイグは、福沢の著作に関する論文を発表し、後に2冊の本―そのうち1冊は燿子の翻訳と共に―を出版した。

彼は東アジアと世界の歴史に関する多くの教科書を共同編集し、日本にとどまらず広い範囲に及ぶ地域の歴史に情熱を注いだ章を執筆した。雑談だけではなく、同僚たちとのランチタイムでも好奇心を持って、彼らが対象としている地域の研究動向について、世界の彼らの地域の研究における傾向について絶え間なく質問をした。彼は大学院生と面談を始めるときはいつも、こう言った。「始める前に、あなたの家族はお元気ですか？　燿子はいつもそれを尋ねるのを忘れないで、と言うんですよ」

1961年、ケネディ大統領は、クレイグの指導教官であり、年上の同僚でもあったエドウィン・ライシャワーを駐日大使に任命した。多くの優秀な大学院生が突然指導を必要とするようになったので、歴史学科はクレイグを准教授としてわずか1年後に、終身雇用の地位に昇進させた。学科長への手紙の中で、ライシャワーは「クレイグは、日本史研究において同世代のトップであり、少数しかいない真のスターたちを超えている」と書いている。その後の40年間、クレイグは何世代もわたる日本史研究者を指導し、40を超える博士論文を指導した。彼はまた30年近くにわたり、一般教養で何千人もの学部生を教えた。コースは親しみをこめて「田んぼ」（Rice Paddies）と呼ばれ、最初の数年間はジョン・フェアバンクとベンジャミン・シュワルツと共に東アジア史、その後エドウィン・ライシャワーとヘンリー・ロゾフスキーと共に10年以上にわたり、特に日本の歴史に焦点をあてた。ピーク時には400人以上の学生が履修した。

クレイグは大学院生たちに幅広く興味を追求することを勧め、彼らの関心は8世紀の人口流動史から戦後の日本の社会政治史に至るまでに及んだ。これらをどのように管理したのかを尋ねられると彼は、親方の姿を見て弟子たちがその隠された技術を盗むという、日本の熟練した職人たちから教育方法のインスピレーションを得たと、ときに冗談を言った。実際、彼は学生たちに対して高い期待と強い支持を抱きながら、頻繁に変化に富んだ「So what（それで、何？）」という質問を投げかけた。彼は筆者たちを含む、中国韓国史の若い同僚の仕事にも、同様に深い関心と励ましを与えた。

クレイグは東アジア研究センター（現在のフェアバンクセンター）の日本担当副所長や日本研究所（現在のライシャワー日本研究所）の所長を含む、いくつかの重要な管理職を歴任した。しかし、彼の最も影響力のあるリーダーとしての役割は、間違いなく中国と韓国に当てられていた。1976年から1987年までハーバード燕京研究所（HYI）を指揮していたとき、1979年にアメリカと中華人民共和国に外交関係が樹立されると、彼は中国を研究所のプログラムに組み入れるために迅速に動き、30年の断絶を終わらせる、中国本土の学者や大学と最初の緊密な関係を築いた。巧みな予算管理で、研究所が毎年招聘する学者の数を2倍にし、韓国、日本、台湾、香港からの学者を減らすことなく、各国との橋を再建した。

クレイグは自身の政治性は表に出さなかったが、政治的および知的自由を守るという意志は強かった。1982年、民主主義指導者であった金大中は、韓国の刑務所から釈放され、アメリカに亡命した。キム氏は、ハーバードで研究を行うよう長年招聘されていた。Korean Institute（韓国研究所）がまだ設立されていなかったので、妥当な受け入れ先はフェアバンクセンターだったが、センターに所属する教員たちは「彼は学者ではない」という理由で招聘を拒否した。これを聞いたクレイグはすぐに、韓国史家であるHYIの最高責任者に、「HYIは通常学者ではない人物を所属させることはないが、今回例外を設けることはできる」と語った。

退職後も、クレイグは研究と執筆、そして水泳への情熱を持ち追求し続けた。80代で、同年代の水泳世界記録を樹立している。

アルバート・クレイグは、2021年12月1日に亡くなり、今は妻の燿子、息子のジョンとポール、そして3人の孫がいる。娘サラは1992年に亡くなった。

敬意をこめて

ピーター・ボル
カーター・エッカート
ヘンリー・ロソブスキー
アンドリュー・ゴードン　責任者

梨花史学研究所との協定に基づく事業
短期研修と韓日歴史をめぐるワークショップ第 6 回

2014年に部局間協定を締結した韓国梨花史学研究所との交流は、コロナ禍において中断あるいは縮小を余儀なくされてきたが、今年度よりようやく短期研修が再開となり、8月15日（月）から20日（土）の日程で、白玉敬梨花歴史館館長（梨花女子大学教授）および梨花歴史館の孫賢知研究員と、梨花女子大学史学科の大学院博士課程3名、修士課程2名の計7名が来日した。

15日は、まず図書館の利用方法等の説明と三田演説館など三田キャンパス内の見学を行った。

18日は午前10時30分より、三田キャンパス北館3階大会議室において、福沢研究センター、梨花史学研究所、梨花女子大学史学科共催の韓日の歴史をめぐるワークショップ（第6回）が行われた。会場では所員や職員、調査員など報告者を含め22名が参加し、今回も昨年同様に併用したZoomでは日韓両国から36名が参加した。

はじめに白玉敬梨花歴史館長、平野隆福沢研究センター所長の挨拶のあと、4本の研究報告（質疑応答を含めて各50分）と全体討論（約90分）が行われた。報告は具が日本語、他3氏が韓国語で行い、参加者にはあらかじめ両言語で報告原稿が配られた。質疑応答の通訳は菅原百合氏が担当した。各報告の内容と主な質疑は、以下の通りである。

具知會（福沢研究センター）の報告「江戸時代の満徳寺住持本梅と将軍正室浄観院」は、尼僧住持と将軍家女性の交流関係を分析することで、満徳寺が幕藩体制下でもつ特性を明らかにした。特に満徳寺住持本梅は、江戸城大奥の家臣的な性格をもって、内証ルートを通じた政治的活動を行い、寺院の経済や住持任命には大奥が関わっていた。そのことから、文化文政期の満徳寺は、徳川家の宮廷寺院としての性格を持っていたと述べた。報告後、満徳寺住持の江戸宿場についての質疑があり、住持の出府時には本人の親族あるいは役人家に泊まったと返答した。

南奇廷氏（梨花女子大学大学院）の報告「キリスト教の韓国宣教初期のBible Womanの性格に関する再検討：その限界と意義」は、19世紀末から20世紀初め、Bible Womanとして活動した朝鮮女性に注目した。Bible Womanとなることで下層民女性たちが外国人宣教師から教育を受け、宣教業務に基づいた医療や教育などの社会活動ができたことを高く評価した。Bible Womanが朝鮮末期の女性の社会的地位および女性に対する認識変化に肯定的な効果があったことは、大きな意義をもつ。報告に対して、Bible Womanは教会から正式な地位が与えられたのかの質疑が出て、雇われて報酬を受けていたのではなかったと応答した。また、日本の基督教が上層部女性と交流したのに対し、朝鮮では下層民女性たちに教育機会を与えることで彼女たちを抱え込んでいたという興味深い指摘もあった。

李熺栽氏（梨花女子大学大学院）の「劉英俊の生涯と活動―新女性の女医から左翼女性運動指導者に至るまで―」は、日帝時期の女医でありながら、解放後には左翼の女性政治家となった劉英俊の生涯を眺望することで、近現代の新女性としての劉英俊を評価した。劉英俊は、荒波の中でも自分の立地構築に尽力し、女性と児童を救済すると同時に、社会主義と女性啓蒙の理想を実現しようとした。このような劉英俊の足跡は、韓国近現代の医療史と女性史、政治史的に重要な意味をもつ。東京女医専を卒業した女医が帰国して、朝鮮の乳児死亡率には変化があったのかという質問に対し、その数値までは分からないが、女医は母子保険・母性保護活動に熱心であったと答えた。

宋河衍氏（梨花女子大学大学院）の「人種主義のくびきの中での結婚―解放後、駐韓米軍の韓国系アメリカ人男性と韓国人女性との結婚」では、同一種族の結婚が一般的とされたアメリカの人種主義政策下、戦争花嫁法によりアジア系米軍人と韓国人女性の国際結婚が一時的に許可された1947年に注目した。当時の結婚報告書を分析し、米軍人と結婚した女性に対する社会的認識やアメリカでの位置を明らかにした。彼女たちに対する韓国人からの視線はよくはなかった。移民国籍法が訂正されるまではアメリカ永住権と市民権を得ることができず、韓国系アメリカ人たちは人種的他者であったことが分かった。日本では優生学との関係で混血を奨励した時期があるが、韓国の政策はどうだったのかについて質問があり、父母の人種が違えば生まれても捨てられる子が多く、社会的な問題になっていたと応答した。

他にも活発な質疑応答が行われ、また昼休みには会場参加者たちが各自の関心や研究テーマを紹介する交流会が設けられた。最後に梨花歴史館の孫賢知研究員から挨拶があり、閉会となった。

19日は三田キャンパス東館4階オープンラボにて、福沢諭吉記念慶應義塾史展示館専門員の横山寛君による特別講義「慶應義塾史展示館のデジタルコンテンツと再現模型」が行われ（通訳具知會）、教員および研修生が受講した。講義では、展示館に設置されている福沢諭吉を中心とする人物データベース「社中 Who's Who」が、多様なカテゴリーで関連人物を検索でき、自身と共通点をもつ人物に対して訪問者たちの同感を呼び寄せることで、学びの場にするための工夫を行ったこと、また、写真や絵図、そして残存する建築物に対する実地調査など、充分に考証した模型を製作するために行った過程について説明があった。

最終日の20日は、未来先導基金によるプログラムに参加し、横浜開港地や日吉キャンパスなどの踏査を行った。踏査について詳しくは8～9頁を参照されたい。

（文責　具知會）

2022年度未来先導基金プログラム

福沢諭吉と「人間交際」を深めるワークショップ

2012年度より未来先導基金の助成を受け、福沢研究センターでは夏休みを利用しワークショップを実施してきた。毎年、高校生や大学生、大学院生を対象に、2泊3日で大阪および中津で福沢諭吉に関する史跡を巡り、『福翁自伝』の読書会や古文書講座も行なっていたが、2020年度および2021年度はコロナ禍の影響で中止となった。

本年度は、行動制限は解除されたものの、全国的にコロナ感染者が再び増加してしまったため、日帰りのバスツアーに変更して開催する事となった。バスツアーは2種類のコースを設定して実施した。7月30日開催のツアーは東京駅を出発し、築地鉄砲洲の「慶應義塾発祥の地記念碑」や芝新銭座の「福沢近藤両翁学塾跡」など慶應義塾に関する史跡を巡り、午後は三田キャンパスにて演説館や慶應義塾史展示館を見学し、最後に麻布山善福寺で福沢諭吉・福沢錦の墓を訪れた。8月20日開催のツアーは、横浜駅を出発し、横浜開港資料館や日本新聞博物館を見学し、午後は日吉キャンパスで日吉台地下壕保存の会の方々にご案内いただき、地下壕内や寄宿舎などを見学した。

参加者は、7月30日が中学生16名（普通部13、SFC中3）、高校生4名（塾高1、SFC高3）であり、引率は大塚彰（志木高）、都倉武之（福沢研究センター）、西沢直子（同前）、馬場国博（SFC中高）、原浩史（志木高）、ミヤン・マルティン，アルベルト（経済学部）、山内慶太（常任理事）、結城大佑（女子高）、渋沢彩佳（福沢研究センター）の9名で、合計29名だった。8月20日が中学生13名（普通部11、SFC中2）、高校生7名（塾高1、志木高4、SFC高2）、大学院生2名であり、引率は朝倉浩一（理工学部）、大塚彰（志木高）、具知會（福沢研究センター）、都倉武之（同前）、西沢直子（同前）、馬場国博（SFC中高）、ミヤン・マルティン，アルベルト（経済学部）の7名であった。また、8月20日には、梨花女子大学の白玉敬教授、梨花歴史館の孫賢知研究員、梨花女子大学の大学院生5名も同行し、合計36名となった。

（文責　渋沢彩佳）

■参加記

※アンケートに寄せられた参加者の感想を、そのまま掲げる。

- 福沢先生の偉大さを肌で感じることができました。暑かったけど参加してよかったです。（普通部）
- 普段行くことの出来ない地下壕にこのワークショップで入ることができたのは非常に大切な経験だったと思います。ぜひまた参加したいと思いました。（普通部）
- 話を聞いている時凄く暑かったので、もう少し涼しい季節や時間にして欲しかったです。でも展示などは良かったと思います。（普通部）
- 三田キャンパスに行ったら山食！というイメージが染み込んでいるので今回とても残念でした。夏休みの貴重な体験時間をとっていただきありがとうございました。（SFC中）
- 今年度初参加のものです。高等部のHRでこのイベントの案内があったために申し込みました。どちらの日程も様々なことが知れてとても面白かったです。三田では、福沢諭吉関連の史跡をめぐることで、自分の福沢諭吉に関する知識がかなり表面的で薄いものだったのだなと感じましたし、日吉の方では、大戦末期に海

軍が実際にいた司令部だったということでやはり言葉では言い表せない重みのようなものを感じました。かつて、沖縄の地下壕に行ったことがあるのですが、そことの雰囲気の差のようなものも感じました。ただ、どちらの日程もすごく興味深かったのですが、日吉の方はどちらかというとあまり福沢諭吉と関連性が少し少ないような気がしました。今回のこのイベントで、他の付属校の様々な生徒や大学の先生たちにも初めて会うことができ、そういった面でも学ぶことが多かったです。イベントの企画ありがとうございました。（SFC 高）

・今回のワークショップで、慶應の歴史だけでなく、当時の歴史的な背景などを絡めて学ぶ事が出来た。又、新たな視点から歴史を見るきっかけになった。（塾高）
・今まで知らなかったことを知り自分の糧になりました。福沢先生の人柄にも触れることができた気がしました。ありがとうございました。（普通部）
・日吉台地下壕保存の会の皆さんの話で、戦争がいかに悲惨で、残酷なものなのかがわかりました。（普通部）
・自分の学校の事を深く知ることができ楽しく、貴重な経験ができてよかったです。（普通部）
・参加してよかったと思います。（普通部）
・普段なかなか見られない歴史のある施設を見学でき、とても勉強になった。（普通部）
・今回のワークショップを通じて福沢の人間交際における歴史探索という貴重な体験ができました。自分がまだ知らない歴史の裏側や関係を辿ったり、歴史的遺産における福沢の存在を実感でき参加して良かったと思います。（志木高）
・幼稚舎の36キロウォークで訪れた場所と似ていた気がしました。（普通部）
・歴史のある施設などをまわれる貴重な体験になった。（普通部）
・福沢諭吉が塾を動かした経緯が分かりやすく、当時福沢諭吉が思っていたことも含めて貴重な体験をして楽しかったです。（普通部）
・今回が初めての参加でしたが、他の慶應の学校と触れ合えるだけでなく、保存会の方々などに解説をしてもらうことができとても楽しかったです。また、来年も参加する予定ですので、よろしくお願いいたします。（普通部）
・初めて知ったことが多く興味深かった。（普通部）
・今回は慶應義塾と福沢先生に関する新しい知識を知れたことがとても良かった。（SFC 中）

7月30日　万延元年　遣米使節記念碑にて

8月20日　日吉キャンパス　地下壕にて

7月30日　三田キャンパス　演説館にて

8月20日　ニュースパーク（日本新聞博物館）にて

2022年度アーカイブズ講座

中津市への協力事業の１つであるアーカイブズ講座が、本年度はようやく東京からも対面での参加ができるようになった。COVID-19の影響で、この２年間はリモート講義の提供のみとなっていた。

2022年度は、８月23日（火）から27日（土）に、新中津市学校（夜間の講義は宿泊施設汽車ポッポ）において実施され、学生は別府大学、久留米大学から合わせて19名、教員・TAは別府大学、久留米大学、慶應義塾大学、神戸大学などから15名が参加した。本年度は８つの講義と原田家の襖の下張り剥し、小田部家の襖の下張りの写真撮影、中津市に寄贈された中津藩上士梅田家資料の調書作成などの実習が行われた。

福沢研究センターからは、教員として所員の上野大輔（文学部）、都倉武之、西沢直子が、TAとして横山寛（福沢記念慶應義塾史展示館専門員）、高野宏峰（福沢研究センター調査員）が参加した。教員は23日に「福沢諭吉と中津」（西沢）「江戸時代の民衆と浄土信仰」（上野）、24日に「下張文書における同定作業」（都倉）の講義を行った。

主な動き

■ 啓明大学校国際学研究所との連携協定

８月17日（水）10：00、ZOOMで両校をつなぎ、連携協定覚書の調印式を行った。これは、2017年８月29日に締結された韓国啓明大学校国際学研究所と当センターの学術研究の推進と研究者交流を目的とした５年間の連携協定を改めて５年間更新するものである。COVID-19の影響により往来が困難と判断し、両校相談の上、ZOOM会議の席上での調印式となった。

■ センター内研究会

当センターのセンター内研究会設置の内規が2022年３月の運営委員会で承認された。それを受けて、「近代日本の慶應義塾とローカルリーダー研究会」（中西聡所員（経済学部）が座長）が、執行委員会で承認され発足した。研究会は５月21日（リモート）と８月30日（対面）に行われ、義塾内外の研究者により活発な議論が行われた。

■ 小幡篤次郎展示

著作集第１巻の刊行に伴い、当センター前の旧図書館１階のホールで、７月より小幡篤次郎関係の小展示を行っている。写真や第１巻のほか、同著と記された『学問のすゝめ』、出版前に福沢が小幡に添削を依頼し「理論ノ品値ヲ増タ」と書かれた『文明論之概略』などのレプリカが展示されている。

また同時に、『多言語で読む中津留別之書』（『福沢研究センター通信』35号参照）に関する展示も行っている。

新収資料紹介

令和４年４月から９月までの間に、福沢研究センターに収蔵された資料を紹介します。多くの方々から貴重な資料をいただきながら、すべての資料を紹介することができず申し訳ありません。

■ 小田部礼宛福沢諭吉書簡　明治27年（1894）12月14日付　１巻　【寄贈】

宇野新吉氏よりご寄贈頂いた福沢諭吉関係資料の中から、３点を紹介する。

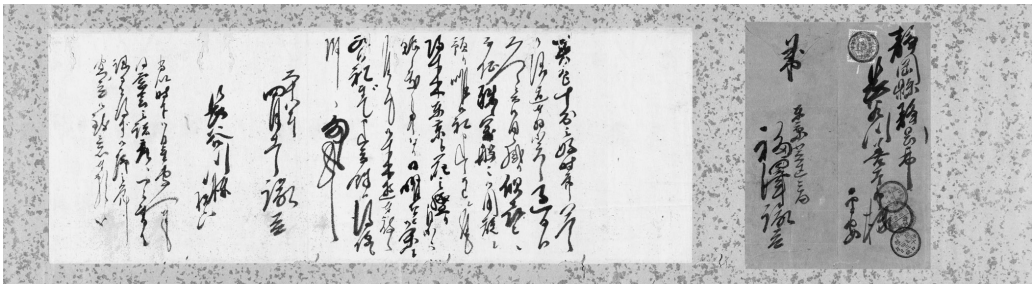
小田部礼は、福沢の１番上の姉。中津藩士の小田部武と結婚し、生涯中津に住んだ。その礼に対して、年末の挨拶と日清戦争へ義捐金を出した心情（安閑に眠食する者が身代を分かち棄るは当然）を述べている。他に、同じく中津に住む３番目の姉である鐘への手当と、礼と鐘、礼の娘２人の４人へ歳末の祝儀を送る旨、また自身が健康で１日に1,200回の居合をしていることも記載がある。

なお、本文は『福沢諭吉書簡集』（全９巻、岩波書店、2001～2003）第７巻（376～377頁）に掲載されているが、現存の書簡には同封されていた「覚」（祝儀を具体的に誰にいくら送るかの部分）が欠損している。

■ 長谷川善太郎宛福沢諭吉書簡　明治28年（1895）４月11日付　１通（１巻）　【寄贈】

宛先の長谷川善太郎は静岡の生まれで、明治16年（1883）に静岡高等英華学校を創設し、明治23年（1890）には静岡県会議員、明治32年（1899）に特選塾員となっている人物。福沢が静岡での同窓会へ出席した際に、世話になった礼を述べている。封筒の住所にミスがあったため、残存している封筒には中継印も含め４つの印が押されている。

『福沢諭吉書簡集』第８巻（44～45頁）に掲載されているが、刊行時には所在がわからず校訂ができなかった。なお、福沢の静岡行については、飯田三治宛福沢諭吉書簡（明治28年３月30日付、『福沢諭吉書簡集』第８巻、36～38頁）に詳しい。



■ 長谷川善太郎宛小幡篤次郎書簡　明治28年（1895）３月27日付　１通（１巻）　【寄贈】

上記書簡の後ろにこちらの小幡書簡が張り込まれ、１つの巻子となっている。

小幡は中津の生まれで、元治元年（1864）に福沢に乞われて入塾、その後短い期間ながら幕府の開成所でも教育者として活動した。明治23年（1890）に塾長および貴族院議員、その後慶應義塾の社頭にも就任している。

静岡県での同窓会へ福沢が隣席できること、開催日については４月初旬であれば現地の都合に合わせることができる旨を伝えるものである。実際、同窓会は４月６日に静岡市で開催された。長谷川が３月中に上京した際、福沢が不在で会えず、小幡に言伝をしたようである。そのため、小幡が福沢の出欠について書簡を送ったのだろう。

なお、本資料は『福沢諭吉全集』第21巻（岩波書店、1971年、448頁）に掲載がある。

■ 慶應義塾幼稚舎在学記念写真 若葉の友

大正12年（1923）４月入学　１冊　【寄贈】

故峰岸豊雄氏よりご寄贈頂いた幼稚舎の卒業アルバム。洗足池・多摩川・高尾山での集合写真や、慶應義塾創立50年式典、運動会や修学旅行の写真など、全29枚の写真が張り込まれている。

右に掲載した写真は、大正13年春洗足池にて撮影されたもの。遠足の様子と思われ、後方には女性の姿も見られる。

（文責　小林伸成）

福沢研究センター諸記録（2022年４月～2022年９月）

■ **諸会議**

＊2022年度執行委員会（４月14日、５月12日、６月16日、７月７日、９月８日）
＊『慶應義塾150年史資料集』第３巻編集委員会（６月７日）
＊2022年度第１回福沢研究センター会議・慶應義塾史展示館所員会議（６月９日）
＊塾史展示館展示企画委員会（７月７日、９月13日）
＊2022年度福沢研究センター・塾史展示館合同運営委員会（７月14日、９月30日）
＊『近代日本研究』第39巻編集委員会（８月29日、９月27日）
＊『慶應義塾150年史資料集』編集委員会（８月31日）
＊小幡著作集編集委員会（９月27日）

■ **人事**

＜所　　員＞　新任　薮本将典（法学部）　４月１日～
＜客員所員＞　新任　太田昭子　４月１日～

■ **主な来往**

＊野球部 OB 種田吉富氏聞き取り（４月７日）
＊中津市教育委員会松岡李奈氏来訪（４月７日）
＊日本ボート協会竹内浩氏来訪（４月13日）
＊三橋氏、資料調査のため来訪（５月17日）
＊奥山篤信氏、坂井達朗君来訪（５月17日）
＊塾高生18人塾史展示館見学対応（６月22日）
＊他大学広報担当15名塾史展示館見学（６月22日）
＊日本大学企画広報部見学対応（７月６日）
＊市川市手児奈調査グループ対応（７月26日）
＊梨花女子大学白玉敬教授、梨花歴史館孫賢知研究員、梨花女子大学大学院生５名来訪（８月15～20日）

■ **取材対応**

＊埼玉新聞（４月21日対応、戦争関係）
＊朝日新聞（４月21日対応、学問のすゝめ関係）
＊毎日新聞（６月16日対応、沖縄発掘万年筆関連）
＊東京新聞（６月17日対応、戦争関係）
＊三田評論三人閑談取材（６月22日対応）
＊NHK（７月19日対応）
＊塾生新聞（８月22日対応、沖縄発掘万年筆ほか）
＊共同通信（８月25日対応）
＊東京新聞（９月29日対応、戦争関係）

■ **出張・見学**

＊都倉、横山、都内で史跡調査・撮影（４月８日）
＊都倉、横山、資料閲覧等のため野球殿堂博物館訪問（４月８日）
＊西沢、酒井君、山根君と坂井達朗君・小室正紀君への聞き取り調査（５月28日）
＊西沢、中津出張（７月12～15日、９月15～17日）
＊久我、中津出張（７月13～14日）
＊都倉、横山、資料調査のため栃木県真岡市出張（７月27～28日）
＊都倉、横山、塾史展示館企画展関係資料調査のため成田市出張（８月８日、９月１～２、５、８～９、28日）
＊西沢、アーカイブズ講座のため中津出張（８月23～27日）
＊都倉、アーカイブズ講座および FutureLearn 撮影のため中津出張（８月24～28日）
＊都倉、横山、資料調査のため上原家訪問（９月22日）

■ **講師派遣**

＊都倉、医学部研修医専修医オリエンテーションにて講義（オンデマンド）：「慶應義塾と福沢諭吉・北里柴三郎」（４月１日）
＊西沢、病院新任職員オリエンテーションにて講義（オンデマンド）：「慶應義塾と福沢諭吉・北里柴三郎」（４月１日）
＊都倉、一貫校新任教職員研修で講演「慶應義塾の特長」、塾史展示館案内（４月２日）
＊西沢、SDM で講義：「福沢諭吉と新しい時代」（４月２日）
＊西沢、新入職員研修にて講演（オンデマンド）（４月11日）
＊都倉、中等部新入生講演：「福沢先生に学ぶこと」（４月11日）
＊都倉、福沢諭吉協会史跡見学会にて塾史展示館展示概要講演（５月11日）
＊都倉、船橋三田会にて講演：「福沢諭吉、私立の苦悩と発展」（５月15日）
＊都倉、SFC 中１年生道徳授業「慶應義塾で何を学ぶか」（６月９日）
＊都倉、横山、田園調布学園大学塾史展示館案内（６月17日）
＊都倉、大倉精神文化研究所講演：「藤原銀次郎と福沢諭吉の「実学」」（６月18日）
＊都倉、応援指導部理念講演：「慶應野球と慶應義塾の精神」（８月10日）
＊横山、梨花女子大学ワークショップ塾史展示館見学にて講義（８月19日）
＊西沢、中津アーカイブズ講座にて講義：「福沢諭吉と中津」（８月23日）
＊上野大輔所員、中津アーカイブズ講座にて講義：「江戸時代の民衆と浄土信仰」（８月23日）
＊都倉、中津アーカイブズ講座にて講義：「下張文書における同定作業」（８月24日）

■ **その他**

＊福沢旧邸保存会理事会（５月９、26日）
＊福沢諭吉協会史蹟見学会（５月11日）
＊西沢、国際センター運営委員会（５月19日）
＊ローカル・リーダー研究会（５月21日、８月30日）
＊西沢、福沢旧邸保存会評議員会（５月26日）
＊西沢、前田氏、山村氏と打合せ（５月27日）
＊都倉、港区文化財保護審議会（５月31日、８月９日、９月14日）
＊久我、竹屋、大学史資料協議会東日本部会総会（リモート）（６月２日）
＊西沢、新中津市学校打合せ（６月10日）
＊塾史展示館企画展「慶應野球と近代日本“ヘラクレス”から“Enjoy Baseball”へ」記念講談会・応援指導部アトラクション（６月11日、７月16日）
＊西沢、三田史学会会議（６月22日）
＊塾史展示館・野球部共催イベント「慶應野球と近代日本“ヘラクレス”から“Enjoy Baseball”へ」シンポジウム（６月25日）
＊西沢、舩木惠子氏と打合せ（６月28日）
＊都倉、美術品管理運営委員会（７月４日）
＊西沢、都倉、KeMCo 運営委員会（７月12日）
＊都倉、FutureLearn 打合せ（７月20日、８月10日）
＊西沢、第３回国際センター運営委員会（７月21日）
＊西沢、都倉、「2022年度未来先導基金プログラム 福沢諭吉と「人間交際」を深めるワークショップ」バスツアー（７月30日、８月20日）
＊啓明大学との部局間協定更新式（zoom）（８月17日）
＊梨花女子大学史学科４段階 BK21 地域史世界史教育研究チーム・梨花史学研究所との「韓日の歴史をめぐるワークショップ Vol. 6」（８月18日）
＊都倉、KeMCo 編集委員会（８月31日）
＊西沢、第16回社会・地域連携室運営委員会（９月26日）

慶應義塾福沢研究センター通信　第37号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日　2022年10月31日　（年２回刊）
編　集
発　行　慶應義塾福沢研究センター
〒108-8345　東京都港区三田２－15－45
電　話　03－5427－1604
http://www.fmc.keio.ac.jp/
印　刷　（有）梅沢印刷所